

Title	「一九三七年一九三八年の兩年アジア大陸に於ける日本の考古學的事業」
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1939
Jtitle	史学 Vol.18, No.1 (1939. 9) ,p.76- 76
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	餘白録
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19390900-0076

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「一九三七年一九三八年の兩年アジア大陸に於ける日本の考古學的事業」

かういふ表題で Harvard Journal of Asiatic Studies, vol.4. No. 1, May, 1939. の中に同大學の Edwin O. Reishauer 氏が一文を草してをる。可成詳細な記述であり、中に昨年度の本塾史學科の大陸旅行に就ても三田評論を題材として委しく述べられてをる。海外にあつて本邦の學界の動きにこれ程注意を持たれてゐるのは感謝に堪えぬが、たゞ遺憾なのは左の一節である。即ち九六頁の脚註に Matsumoto, who is well known in the west because of his years of study in Paris and his articles in French on Japanese mythology, has written some very full but surprisingly jingoistic and anti-western reports in the Mito hyoron とあるのは少しく心外である。自分の「三田評論」に書き送つた通信の中に多少なりとも jingoistic and anti-western と見られる箇所は揚子江を下る大吉丸船上のカトリック宣教師のことを敘し、「白人全盛の時代は傾いた」と書いた所しかなく、之が著者の氣に障つたのかも知れぬ。然し支那に於ける日本の優越權主張が今度の事變の主意であり、此點歐米人の認識が是正されるか否かに今事變の成否が決定される譯である。既に三年以上砲煙彈雨の中に交戦が繼續してをる時我國民の一人として此極東に於ける正統なる事態の辯護をしない譯にはゆかぬ。此點自分は予の記事がけしことさうして jingoistic and anti-western であるとは思はぬが之をさうとられぬのは著者と予との間に於ける國籍上の違ひより來る見解の相違であらう(松本信廣)。